

抑うつと検索誘導性忘却

—ポジティブ情報の想起はネガティブ情報の想起を抑えるか?—

高山 桃香 兵庫教育大学大学院学校教育研究科

月元 敬 岐阜大学

Depression and retrieval-induced forgetting: Does remembering positive memories inhibit remembering negative memories?

Momoka TAKAYAMA (*Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education*)

Takashi TSUKIMOTO (*Gifu University*)

ある項目を検索することによって、関連した他の項目が抑制され、記憶成績が低下する現象を検索誘導性忘却 (retrieval-induced forgetting: RIF) という (Anderson, Bjork, & Bjork, 1994; 月元・川口, 2006)。本研究では、検索経験パラダイムにおいて、通常、ベースラインとされる Nrp 項目 (no retrieval practice item) の正再生率に着目して、刺激の感情価と抑うつ傾向が記憶パフォーマンスに与える影響について検討した。実験の結果、ネガティブ単語を検索経験した場合、ポジティブな Nrp 項目の再生率が、抑うつ群より非抑うつ群の方が高かった。これは、ネガティブ単語の検索経験によるポジティブな Nrp 項目への抑制が、非抑うつ群において減少及び消失する可能性を示している。また、ネガティブな Rp-項目について、ポジティブ単語を検索経験した群で抑うつ傾向の効果、抑うつ群において単語の感情価の効果により、要因による参加者間の Rp-項目の抑制効果が生じたことから、抑うつ者はポジティブ単語を単に処理しにくいというよりもむしろ抑制しやすいという性質を持っている可能性が示唆された。

Key words: memory, retrieval-induced forgetting, quasi-retrieval-induced forgetting, depression

近年の認知心理学的記憶理論では、想起する際の重要な処理として検索 (retrieval) と抑制 (inhibition) が仮定される。検索は、記憶構造の中から活性化した記憶表象の中から必要な記憶 (target memory) を探す処理であり、抑制は、その他の記憶の活動を低下させる処理を指す。適切な想起のためには、競合する記憶表象 (competitors) への抑制が適切に働くことが重要となる (月元, 2007)。想起に関するこのような考え方は、検索誘導性忘却を発見し、実験パラダイムを考案した Anderson, Bjork, & Bjork (1994) 以降、広く浸透してきている。

検索誘導性忘却 (retrieval-induced forgetting: RIF) は、非意図的・間接的な記憶検索によって生じる抑

制現象である。より具体的に言えば、RIF とは、ある特定の項目を検索する際に、それと関連する他の項目が抑制され、後の検索機会において、その抑制された項目の記憶成績が低下するという現象である (Anderson et al., 1994; 月元・川口, 2006)。

通例、RIF は検索経験パラダイム (retrieval practice paradigm) と呼ばれる実験手続きによって検討される。この手続きは、(1) 学習段階、(2) 検索経験段階、(3) 最終再生段階という3段階で構成される。学習段階では、実験参加者はそのカテゴリとその事例からなる対連合 (例: 果物—レモン, 果物—バナナ, 武器—ナイフ, 武器—ピストル) を学習する。次の検索経験段階では、学習段階において学習した刺激のうち、

半分のカテゴリの中のさらに半分の事例について、カテゴリ名と事例の頭文字を手がかり (例: 果物—レ) とする語幹手がかり再生 (word-stem cued recall) を行う (標準的な手続きでは、検索経験は3回行われる)。この時、検索経験された項目を Rp+項目 (retrieval practice+ item; 例: レモン), Rp+項目と同じカテゴリだが検索経験されない項目を Rp-項目 (retrieval practice- item; 例: バナナ), Rp+項目及び Rp-項目と異なるカテゴリの項目を Nrp 項目 (no retrieval practice item; 例: ナイフ, ピストル) と操作的に定義される (Figure 1)。その後、数分から数十分のディストラクタ課題の後、最終再生段階において、カテゴリ名のみを提示するカテゴリ手がかり自由再生 (category-cued free recall) として学習段階で覚えた項目を想起する。なお、思い出す項目の順序を統制したりランダム化したりするために、カテゴリ—語幹手がかり再生 (category plus word-stem cued recall) が用いられる場合もある。典型的な結果として、Nrp 項目の正再生率と比べた時に、Rp+項目の正再生率はより高くなる。これは検索経験による練習効果である。一方、Rp-項目の正再生率は Nrp 項目の正再生率より低くなる。このように、検索経験を行わなかった Rp-項目の検索可能性が低下する現象が RIF である。

RIF 研究では通常、Nrp 項目の正再生率をベースラインとし、Rp-項目との正再生率を比較することによって RIF の有無を検討する。しかし、Rp+項目と属するカテゴリが異なるはずの Nrp 項目もまた抑制されていることが示されている。Tsukimoto & Kawaguchi (2006) は、検索経験段階の代わりにディストラクタ

課題を行った群の最終再生率と、通常の実験段階を経た群の Nrp 項目の再生率を比較した。その結果、RIF の検出に用いられる Nrp 項目の再生率の方が低かった。このことから Tsukimoto & Kawaguchi は、検索経験時に、Rp+項目とカテゴリを共有することで活性化する Rp-項目が抑制されるだけでなく、Rp+項目と「学習段階で覚えた」というエピソードあるいは文脈を共有することで活性化する Nrp 項目も抑制されると論じている (文脈の共有に由来する活性化は Rp-項目でも生じていると考えるのが自然であろう)。このように、Rp+項目の検索経験によって Nrp 項目も抑制され、最終再生率が低くなることを Anderson (2003) はベースライン・デフレーション (baseline deflation) と名づけたが、これを実験的に直接扱っている研究は非常に少ない。しかし、Murayama, Miyatsu, Buchli, & Storm (2014) は RIF 研究のメタ分析によってベースライン・デフレーションの存在を示している。

Nrp 項目への抑制に着目した数少ない研究として Harris, Sharman, Barnier, & Mould (2010) は、想起された感情的な自伝的記憶を扱っている。彼女らは、ネガティブな自伝的記憶の検索経験でのみ RIF が生じることを示したが、これはベースラインの特徴的な差異によるものであった。すなわち、Nrp 項目の正再生率はポジティブな自伝的記憶の方がネガティブな自伝的記憶よりも高かった。言い換えると、RIF の効果は対象となる自伝的記憶の感情価によって異なることや、ネガティブな記憶を検索経験することによりネガティブな記憶は抑制されるが、ベースライン・デフレーションはポジティブな記憶を検索経験した時の Nrp 項目すなわちネガティブな自伝的記憶に生じることが明らかとなった。

Nrp 項目の成績に着目した Harris et al. (2014) の結果は、ポジティブな記憶には抑制を受けにくいという性質があることを示唆している。さらに、ネガティブな記憶への抑制効果は特定の記憶のカテゴリにおいてのみであった。このように興味深い知見であるものの、自伝的記憶を用いた研究の性質上、記憶の内容や感情価、手がかりとの関連の統制が成り立っていないというやむを得ない問題がある。

一般に、ポジティブな記憶を再生することは幸福

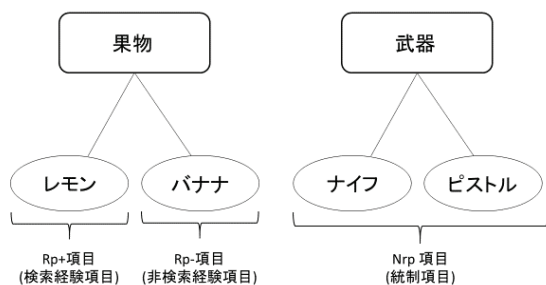


Figure 1. 検索経験パラダイムにおける項目タイプの定義。

感を高める効果、ネガティブな記憶を再生することは過去の失敗を繰り返さないための効果などがあり、人は感情的な記憶に関するバイアスをもっていることが知られている。特に、ネガティブな情報に比べ、ポジティブな情報をより再生する傾向はポジティブティ・バイアス (positivity bias) と呼ばれている。このポジティブティ・バイアスは、望ましい自己イメージを保つために、良い自己イメージと一貫性のあるポジティブな記憶を再生し、自己イメージを悪化させるネガティブな記憶を抑制するために生じると考えられている (Sedikides & Green, 2009)。

ところが、抑うつ傾向の高い者においては、この典型的なポジティブティ・バイアスを示さず、ポジティブな情報よりネガティブな情報をより想起しやすいことが明らかになっている (Burt, Zembar, & Niederehe, 1995; cf. Harris et al., 2014)。このことから、抑うつ気分が感情的な記憶の想起に影響を与え、RIFの効果も変化することが考えられる。

本研究では学習リストを用いた検索経験パラダイムを行うことで、統制された条件下において、RIFとともに、刺激の感情価がベースラインである N_{rp} 項目の正再生率に与える影響について検討することを目的とする。また、抑うつ傾向が N_{rp} 項目の正再生率に与える影響について検討する。

仮説は以下の通りである。第一に、一方の感情価を伴う単語を検索経験することにより、ベースラインとなる N_{rp} 項目である他方の感情価を伴う単語抑制され、正再生率は低下するだろう。特に、ポジティブティ・バイアスによりポジティブ単語に対する抑制効果よりネガティブ単語に対する抑制効果の方が大きくなるだろう。第二に、抑うつ傾向の高い者はネガティブな記憶をより想起しやすいという性質から、ネガティブな単語への抑制効果は、非抑うつ群より抑うつ群の方が低くなるだろう。

方法

実験参加者 岐阜大学教育学部 76名 (男性 28名, 女性 48名)。平均年齢は 20.43 歳 ($SD=0.17$)。実験は個別に行った。

実験計画 項目タイプ (参加者内: R_{p+} vs. R_{p-} vs. N_{rp}) × 検索経験する刺激の感情価 (参加者間: ポ

Table 1

実験で使用した感情語 24 個及びフィルター単語 4 個

| 熟語の種類 | 刺激語 | | | |
|---------|-----|----|----|----|
| ポジティブ単語 | 快晴 | 達成 | 幸運 | 成功 |
| | 最高 | 勝利 | 応援 | 満点 |
| | 実績 | 有望 | 健康 | 抜群 |
| ネガティブ単語 | 暗殺 | 水爆 | 絶望 | 追放 |
| | 偏見 | 倒産 | 病気 | 遭難 |
| | 迷惑 | 泥棒 | 恐怖 | 苦境 |
| フィルター単語 | 財界 | 日曜 | 停滞 | 永年 |

ジティブ R_{p} vs. ネガティブ R_{p}) × 抑うつ傾向 (参加者間: 非抑うつ vs. 抑うつ) を独立変数とし、最終再生段階における正再生率を従属変数とする 3 要因混合計画。

実験材料 **刺激語** 五島・太田 (2001) が調査して取りまとめた感情価を持つ漢字 2 字熟語から、ポジティブな感情価を持つ単語、ネガティブな感情価を伴う単語それぞれ 14 個ずつ選定し、計 28 個の単語からなるリストを作成した。なお、平仮名表記に直した際に文字数が 4 つであること、平仮名表記での頭文字が他の単語と異なるという条件を満たすように単語を選定した。これら 28 個の単語のうち、感情価が比較的弱い 4 個をフィルター項目とした (Table 1)。一方の感情価を伴う単語の検索経験を行った場合 (R_{p} 項目)、もう一方の感情価を伴う単語は検索経験の対象とはせず統制項目 (N_{rp} 項目) とした。 R_{p} リスト及び N_{rp} リストの割り当ては、参加者間でカウンターバランスした。また、各 R_{p} 項目のうち、半数が R_{p+} 項目、残りの半数が R_{p-} 項目となるが、これらも参加者間でカウンターバランスした。

再生課題 検索経験では、 R_{p+} 項目を指定するために語幹手がかり再生を用いた。そのため、各単語の平仮名表記における頭文字と 3 文字分の下線からなる文字列を検索経験段階での手がかりとして用いた (例: ろくおん→ろ____, ていたい→て____)。また、最終再生段階では、自由再生を用いた。

ディストラクタ課題 ディストラクタ課題として、点つなぎ課題を 3 題 (株式会社ニコリ, 2016) を用いた。これら 3 題は全体で 5 分間で解ききれないよう

な点つなぎ問題を選んだ。

実験プログラム 学習段階及び検索経験段階それぞれにおいて、刺激語及び語幹手がかりをランダムに呈示するプログラム (PsychoPy v2) を作成した。

学習段階のプログラムは、初めに教示文を呈示し、実験参加者の準備が整い、スペースキーを押すと実験が開始する仕組みであった。スペースキーを押すと、注視点が画面中央に 500ms 呈示された後、中央に単語が 5000ms 呈示された。また、単語の呈示とともに、その単語の感情価 (ポジティブ or ネガティブ) と漢字が呈示された (Figure 2)。また、初頭効果及び新近効果を除外するため、最初と最後はフィラー項目が 2 語ずつ呈示され、実験語 24 語はランダムに提示された。

検索経験段階のプログラムは、実験参加者が教示画面でスペースキーを押すと、注視点が画面中央に 500ms 呈示された後、画面中央に Rp+項目の語幹手がかりが 3000ms 呈示された。この時、語幹手がかり

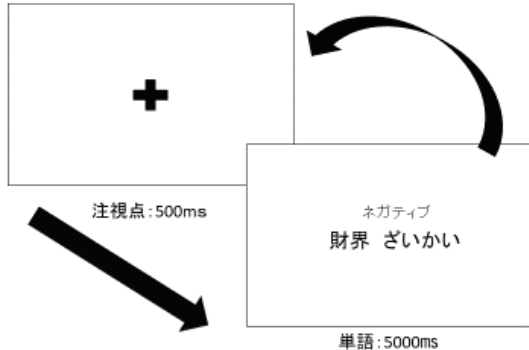


Figure 2. 学習段階における試行の流れ。

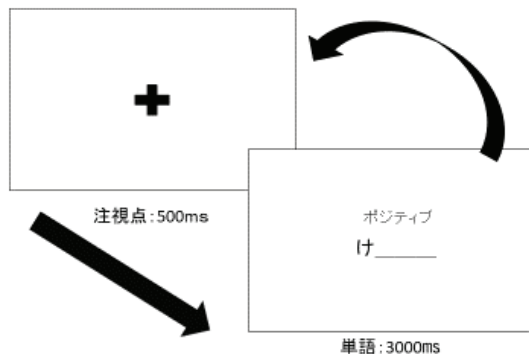


Figure 3. 検索経験段階における試行の流れ。

とともに、感情価 (ポジティブ or ネガティブ) が呈示された (Figure 3)。検索経験は 6 語に対して行った。Rp+項目カウンターバランスをとるために検索経験段階のプログラムを 4 つ作成した。

Beck 抑うつ尺度 実験参加者の抑うつ傾向を測定するため、Beck Depression Inventory (Beck, Ward, Mendelson, Mock, & Erbaugh, 1961) の翻訳版である日本版ベック抑うつ評価尺度 (林, 1988; 林・瀧本, 1991) を用いた (以下、BDI とする)。BDI は 21 項目からなる 4 件法 (0~3) の自己評価式尺度である。なお、本研究では、実験参加者に対する倫理的な配慮として、第 9 項目「自殺念慮」を除いた 20 項目を用いた。このため、この尺度の得点の範囲は 0~60 点であった。

手続き 実験参加者が実験室し、PC の前に着席した後、実験参加者には、感情的な意味を伴う単語に関する記憶実験と、眼球と手の連動に関する実験に参加してもらうことを教示した。なお、実験参加者の個人情報の保護には最大限配慮すること、実験の参加・不参加は強制ではなく任意であること、やめたくなったら途中でやめても問題はないことを教示し、不明点がないかを尋ね、質問には適宜回答した。その後、実験参加者には参加同意書に記入してもらい、実験を開始した。

学習段階において、実験参加者はモニタ上に呈示される刺激語を、後に行うテストのためにすべて覚えるように教示された。すべての単語の呈示が終了した後、検索経験段階において、実験参加者は、先ほどの学習段階で覚えた単語のテストを行った。実験参加者は、モニタ上に呈示される語幹手がかりをもとに、学習した単語を思い出し口頭で回答するように教示された。

検索経験終了後、5 分間の妨害課題段階を実施した。実験参加者には、3 枚の点つなぎ課題を配布し、眼球と手の連動について調査するため、5 分間の点つなぎの成績を測定すると教示した。点つなぎ課題に関する質問には適宜回答した。

最終再生段階において、実験参加者は、白紙を配布され、学習段階において覚えた単語をすべて書き出すように教示された。この際、時間の制限や回答方式の決まりは設けず、書き終わったら、実験者に声をかけるように教示した。

自由再生の後、実験参加者はBDIに回答した。その後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。

結果

検索経験成功率 検索経験段階で行われた語幹手がかり再生テストの正再生率（検索経験成功率）は47.1% ($SD = 0.25$)であった。このうち、検索経験成功率が50%以下の者を除外した41名（男性12名、女性29名）を有効分析対象とした。有効分析対象者の検索経験成功率は66.7% ($SD = 0.14$)であった。

抑うつ傾向による群分け 有効分析対象者の平均BDI得点は11.15点 ($SD = 7.94$)であった。William (1983 中村監訳 1993)に基づき、さらに本実験で除外した項目数を勘案して、0~13点の29名（男性9名、女性20名）を非抑うつ群（平均BDI=7.17, $SD = 2.89$ ）、14点以上の12名（男性3名、女性9名）を抑うつ群（平均BDI=20.75, $SD = 8.06$ ）とした。

以上の手続きにより、「非抑うつ+ポジティブRP」群が19名（男性7名、女性12名；平均BDI = 7.05, $SD = 2.89$ ）、「非抑うつ+ネガティブRP」群が10名（男性2名、女性8名；平均BDI = 7.40, $SD = 2.87$ ）、「抑うつ+ポジティブRP」群が4名（女性のみ；平均BDI = 18.50, $SD = 3.20$ ）、「抑うつ+ネガティブRP」群が8名（男性3名、女性5名；平均BDI = 21.88, SD

= 9.41）という内訳となった。

最終再生におけるRIFの検討 最終再生段階（自由再生）における成績をFigure 4に示す。これらの正再生率について、抑うつ傾向（参加者間：非抑うつ vs. 抑うつ）×検索経験の感情価（参加者間：ポジティブRP vs. ネガティブRP）×項目タイプ（参加者内：Rp+ vs. Rp- vs. Nrp）を独立変数とする3要因分散分析を行った。その結果、項目タイプの主効果 ($F(2, 74) = 73.61, p < .001, \eta_p^2 = .67$)、抑うつ傾向と項目タイプの交互作用 ($F(2, 38) = 4.14, p = .02, \eta_p^2 = .10$) が有意、抑うつ傾向と検索経験の感情価、項目タイプの2次の交互作用が有意傾向であった ($F(2, 74) = 2.86, p = .06, \eta_p^2 = .07$)。これら以外の主効果/交互作用は認められなかった ($F_s < 1.5, n.s.$)。

2次の交互作用について下位検定を行ったところ、ネガティブ単語における抑うつ傾向と項目タイプの交互作用が有意であり ($F(2, 74) = 4.24, p = .02, \eta_p^2 = .09$)、ポジティブRPにおける抑うつ傾向と項目タイプの交互作用、非抑うつ群における検索経験の感情価と項目タイプの交互作用が有意傾向であった（それぞれ、 $F(2, 74) = 2.77, p = .07, \eta_p^2 = .06$; $F(2, 74) = 2.42, p = .10, \eta_p^2 = .06$ ）。その他の単純交互作用は認められなかった ($F_s < 2, n.s.$)。

次に、単純・単純主効果の検定を行ったところ、ポ

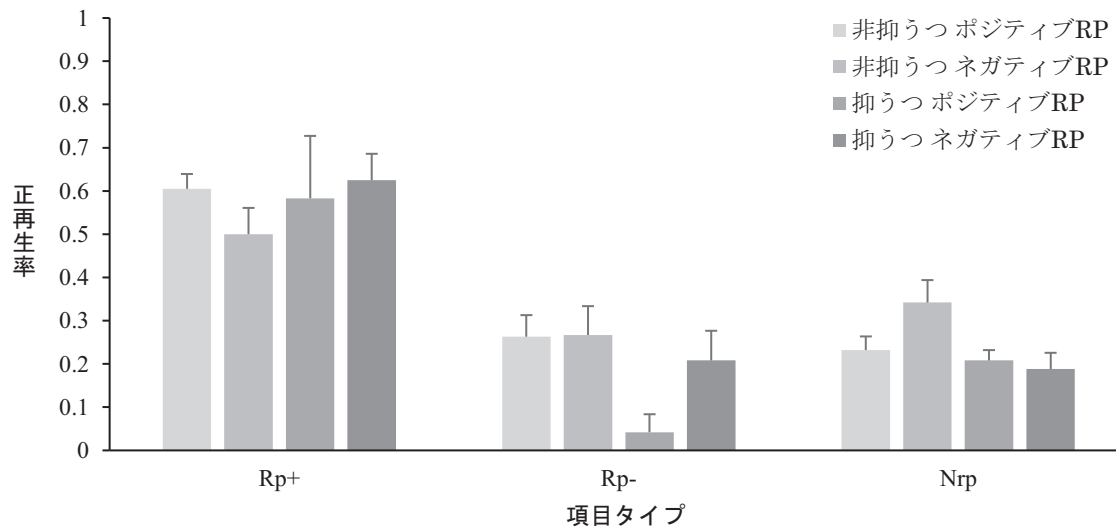


Figure 4. 各群における項目タイプの正再生率（エラーバーは標準誤差）。ポジティブRP/ネガティブRPは検索経験の対象となった刺激の感情価を表す。

ジティブ RP の Rp-項目における抑うつ傾向が有意であり ($F(1, 111) = 6.07, p = .02, \eta_p^2 = .05$), ネガティブ RP の Nrp 項目における抑うつ傾向が有意傾向であった ($F(1, 111) = 2.94, p = .09, \eta_p^2 = .03$)。また、抑うつ群の Nrp 項目における検索経験の感情価が有意傾向であった ($F(1, 111) = 3.44, p = .06, \eta_p^2 = .03$)。

さらに、項目タイプの単純・単純主効果はすべて有意であった (非抑うつ群のポジティブ RP: $F(2, 74) = 18.04, p < .001, \eta_p^2 = .31$; 非抑うつ群のネガティブ RP: $F(2, 74) = 5.98, p = .004, \eta_p^2 = .13$; 抑うつ群のポジティブ RP: $F(2, 74) = 32.42, p < .001, \eta_p^2 = .44$; 抑うつ群のネガティブ RP: $F(2, 74) = 25.66, p < .001, \eta_p^2 = .38$)。これらに対する Ryan 法による多重比較の結果はいずれについても、Rp+項目が Rp-項目と Nrp 項目よりも有意に高いが、Rp-項目と Nrp 項目に有意な差は認められなかった。

考察

本研究の目的は、検索経験を行った単語の感情価がベースラインである Nrp 項目の正再生率に与える影響について検討することであった。同時に、検索経験パラダイムにおける Nrp 項目の正再生率に対して抑うつ傾向が与える影響について検討した。

仮説は以下の通りであった。ポジティブ・バイアスの観点から、Nrp 項目に対する抑制効果は、1) ポジティブ単語よりネガティブ単語の方が大きくなり、2) ネガティブ単語において非抑うつ群の方が、抑うつ群より大きくなるだろう。実験の結果は、これらの仮説とは異なるものであった。また、どの群でも RIF のパターンは検出されなかった。しかしながら、Rp-項目と Nrp 項目では予想していなかった結果となったため、それらについて以下考察する。

Nrp 項目の正再生率 ネガティブ単語を検索経験した場合、Nrp 項目 (これはポジティブ単語であることに注意) について抑うつ傾向の効果が見られた。すなわち、非抑うつ群の方が抑うつ群よりも Nrp 項目の正再生率が高かった。これは、ネガティブ単語を検索経験することで生じるポジティブな Nrp 項目への抑制が、非抑うつ群において減少あるいは消失する可能性を示唆している。これは、Harris et al. (2010) の結果と一致するものであり、非抑うつ者において

のみポジティブ・バイアスが生じたと考えられる。非抑うつ者が文字通り抑うつ的でないのは、彼らのポジティブ記憶の再生可能性が一定に保たれているためなのかもしれない。但し、非抑うつ群の Nrp 項目における感情価の違いは、記述統計的には差があるように見えるものの有意ではなかったため、前述のポジティブ・バイアスは、非抑うつ者においてネガティブ記憶よりもポジティブ記憶が優位であることを意味するものではない。あくまでも、ポジティブな Nrp 項目に対して、非抑うつ者よりも優位であるという限定的なバイアスである。

Rp-項目の正再生率 ポジティブ単語を検索経験した場合、Rp-項目 (これはポジティブ単語であることに注意) について抑うつ傾向の効果が見られた。より具体的には、抑うつ群の方が非抑うつ群よりも Rp-項目の正再生率が低かった。参加者内で見られる従来の RIF と区別し、参加者間で見られる Rp-項目の抑制効果を「準検索誘導性忘却 (quasi-retrieval-induced forgetting: Q-RIF)」と呼ぶことにするならば、本研究で見られた Q-RIF は、ポジティブ単語を検索経験することにより、関連するポジティブ単語への抑制効果が、抑うつ群の方が非抑うつ群に比べて大きいことを示唆する。

また、抑うつ群において、ポジティブ単語を検索経験する方が、ネガティブ単語を検索経験する場合に比べ、Rp-項目の正再生率が低かった。これも Q-RIF と呼ぶことができる。この Q-RIF は、ポジティブ単語を検索経験する際のポジティブな Rp-項目への抑制効果が、ネガティブ単語を検索経験する際のネガティブな Rp-項目への抑制効果に比べて大きいことを示唆する。

以上のことは、抑うつ傾向と単語の感情価が Q-RIF に関与することを示している。

抑うつ者はネガティブ単語を優先するような認知処理を持つと考えられる。例えば、抑うつ者はネガティブな情報に対してのみ、より注意を向けるという潜在的なバイアスを持つ一方で、ポジティブな情報を処理しない可能性があることが指摘されている (Donaldson, Lam, & Mathews, 2007)。本研究における Q-RIF は、抑うつ者がポジティブ単語を単に処理にくだいというよりも、むしろ抑制しやすいという性質

を持っている可能性を示している。

本研究は、抑うつ傾向と単語の感情価による各項目の正再生率の抑制を示した。検索経験パラダイムを用い、参加者内の各項目の正再生率と Nrp 項目の正再生率を検討した研究はいくつかあるが、各項目の正再生率に対する参加者間の要因の影響を示した研究は少ない (cf. Harris et al., 2010; Tsukimoto & Kawaguchi, 2006)。その点で、本研究が示した知見は、RIF による抑制効果に関する新たに貢献し得る、意義のあるものであるといえるだろう。

しかし、本研究には問題点もある。以下、本研究の課題を 2 点述べる。

1 つ目に、学習段階における単語の学習が不十分であったために、適切な検索経験が行われていなかった点である。実際に、検索経験成功率が 50% 以下のものを除外したにも関わらず、有効分析対象者の検索経験成功率は 66.7% と低かった。RIF についての研究では通常、カテゴリ名とそのカテゴリに属する関連性の高い項目との対連合が用いられる。しかし、本研究においてはカテゴリではなく、ポジティブ/ネガティブという感情カテゴリを用いたため、項目との関連が従来の実験刺激よりもかなり弱く、検索経験段階における語幹手がかりでは単語を再生することが難しかったと考えられる。そのために、項目タイプに対する操作的定義が相対的に緩くなってしまったことは否定できない。Rp+項目は検索経験されてこそ Rp+項目となり、同時にそれによって Rp-項目が定まるのであり、この操作的定義が従来の他の RIF 研究に比べると弱かったと思われる。

2 つ目に、単語の設定が不十分であった可能性がある。本研究は、先行研究で使われていた五島・太田 (2001) を参考に単語の選定を行った。しかし、頭文字が被らない、4 文字の単語という制限の中の選定であり、各単語の持つ感情価の強さに多少幅があったかもしれない。

これら 2 つの可能性について、事前調査を行い、参加者にとって感情価との関連が強く意味を捉えやすい単語を選定することや、各参加者がポジティブ、ネガティブという感情カテゴリから想起した単語を用いることで、感情カテゴリと単語の関連の強い対連合を用いた検索経験パラダイムを行うことが可能

となり、より明確な結果が得られるかもしれない。

また、大島・新井・濱口 (2010) は、抑うつ傾向の強い者のポジティブ情報に対する回避的な注意バイアスは、その情報が自分に関連している場合により強く示されることを明らかにしている。そのため、個人に関連した感情的な自伝的記憶について同様の実験パラダイムを用いることによって、感情的な記憶に対するより高い抑制効果が現れることが予想される。そのため、ポジティブな自伝的記憶を検索経験することによるネガティブな自伝的記憶への抑制効果を検討することにより、ネガティブ記憶により引き起こされる抑うつ気分からの回復や抑うつ気分へ陥ることへの予防に寄与する有用な手がかりを得ることができるだろう。

引用文献

- Anderson, M. C. (2003). Rethinking interference theory: Executive control and the mechanisms of forgetting. *Journal of Memory and Language*, 49 (4), 415-445.
- Anderson, M. C., Bjork, R. A., & Bjork, E. L. (1994). Remembering can cause forgetting: Retrieval dynamics in long-term memory. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 20 (5), 1063-1087.
- Beck, A. T., Ward, C. H., Mendelson, M., Mock, J., & Erbaugh, J. (1961). An inventory for measuring depression. *Archives of General Psychiatry*, 4, 561-571.
- Burt, D. B., Zembard, M. J., & Niederehe, G. (1995). Depression and memory impairment: A meta-analysis of the association, its pattern, and specificity. *Psychological Bulletin*, 117 (2), 285-305.
- Donaldson, C., Lam, D., & Mathews, A. (2007). Rumination and attention in major depression. *Behaviour Research and Therapy*, 45 (11), 2664-2678.
- 五島 史子・太田 信夫 (2001). 漢字二字熟語における感情価の調査. 筑波大学心理学研究, 23, 45-52.
- Harris, C. B., Sharman, S. J., & Mould, M. L. (2010). Mood and retrieval-induced forgetting of positive and negative autobiographical memories. *Applied Cognitive Psychology*, 24 (3), 399-413.
- 林 潔 (1988). 学生の抑うつ傾向の検討. カウンセ

- リング研究, 20 (2), 162-169.
- 林 潔・瀧本 孝雄 (1991). Beck Depression Inventory (1978年版) の検討と Depression と Self-efficacy との関連についての一考察 白梅学園短期大学紀要, 27, 43-52.
- Murayama, K., Miyatsu, T., Buchli, D., & Storm, B. C. (2014). Forgetting as a consequence of retrieval: A meta-analytic review of retrieval-induced forgetting. *Psychological Bulletin*, 140 (5), 1383-1409.
- ニコリ (株) (2016). パズル通信ニコリ別冊 ザ・点つなぎ5 ニコリ
- 大島 由之・新井 邦二郎・濱口 佳和 (2010). 抑うつ, 不安の強い児童・生徒の注意バイアスは情報の自己関連性に影響を受けるか? 日本心理学会第74大会発表論文集, 296.
- Sedikides, C., & Green, J. D. (2009). Memory as a self-protective mechanism. *Social and Personality Psychology Compass*, 3 (6), 1055-1068.
- 月元 敬 (2007). 抑制に基づく記憶検索理論の構成 風間書房
- 月元 敬・川口 潤 (2006). 検索誘導性忘却研究の展望 人間環境学研究, 4(2), 31-41.
- Tsukimoto, T., & Kawaguchi, J. (2006). The contribution of category-based and contextual suppression towards retrieval-induced forgetting. *Japanese Psychological Research*, 48 (1), 40-45.
- Williams, J. M. G. (1983). *The psychological treatment of depression: A guide to the theory and practice of cognitive-behaviour therapy*. London: Croom Helm Ltd.
- (ウィリアムス, J. M. G. 中村 昭之 (監訳) (1993). 抑うつの認知行動療法 誠信書房)